

再チャレンジ可能な単元テストによる評価で、 目標に向けて主体的に学ぶ意欲を育む

岩手県・私立専修大学北上高校

岩手県・私立専修大学北上高校は、2023年度から普通科の一部の専攻で定期考査を廃止し、単元テストを軸にした単元ごとの評価を導入した。生徒が主体的に目標を設定し、学びの意欲を高められるように、単元テストの再受験を認め、その結果も総括的評価に組み込んでいる。再チャレンジが可能な単元ごとの評価は、教師や生徒にどのような変化をもたらしたのだろうか。

各教科・科目の到達目標と 到達の時期を生徒が決める

専修大学北上高校は、2022年度から「未来を創る力」をキーワードとした普通科改革に取り組んできた。それまでの普通科を、探究学習やPBL（*1）を中心に学力の向上を図るディープラーニング（DL）コース（学問探究・PBLの2専攻）、福祉やビジネス、スポーツ科学などの専門分野を追究するアクティブラーニング（AL）コースの2コースに改編。コース・専攻の目的に応じたカリキュラムの開発とともに、新しいシラバス（学期シラバス）の作成にも取り組んだ。

新シラバスの特徴は、学習の到達目標を生徒自身が決める点にある。教科・

科目ごとに、基礎・標準・発展の3つのレベルを設け、それぞれ学期ごとのTODO、CAN-DOをシラバスに明記。

生徒は将来の志望や現状の学力に応じて、目指すレベルを自分で選ぶ。それは生徒がより主体的に学びに取り組むための工夫だ。そうした生徒の主体的な学びの実現を目指す改革の延長線上に、定期考査の廃止と単元テストを軸にした単元ごとの評価の導入が行われたと、川村俊彦副校長は説明する。

「各教科・科目の学習の到達目標を生徒が自分で決めるのであれば、目標に到達する時期も生徒に決めさせて、学びの見通しを持つ経験を積ませたい。そして、もし自分が設定した目標に到達しなかった時は、今の自分は何ができて、何ができていないのかを自

分で把握し、目標に到達するために何度でも挑戦できる仕組みをつくらうと考え、評価の改革に着手しました」

かつての同校における総括的評価の中心は、多くの学校と同様、定期考査で実施されるペーパーテストだった。定期考査は決められた時期に一齐に実施されるが、部活動で全国レベルの活躍をする生徒や探究学習などで校外での活動に取り組む生徒、テスト期間中に体調不良になった生徒などは、万全のコンディションでテストに臨めるとは限らない。また、例えば1学期に低い点数を取ってしまうと、その時の出題内容を2学期以降に努力して習得したとしても、評価の結果を変えることができないのが定期考査だ。

さらに、授業における単元間の切れ

目で定期考査が実施されるとは限らず、単元の途中で定期考査が行われることも多かった。そのため、各単元で育成を目指す資質・能力を丁寧に評価することが難しかった（図1）。

「大切なのは、生徒が確実に学力を身につけることであり、例えば1学期に学習した単元を2・3学期に理解することがあってもよいはず。本物の学力を身につけさせるためには、定期考査を区切りにして評価するのではなく、再チャレンジの機会を与えることが必要だと考えました」（川村副校長）

そこで同校では、23年度から普通科DLコースの学問探究専攻で定期考査を廃止し、各単元の学習後に行う単元テストを軸にした単元ごとの評価を導入。さらに、希望する生徒には単元テ

* 1 Problem Based Learning、または Project Based Learning の略。

学校概要
 設立 1951(昭和26)年
 形態 全日制／普通科・グローバルビジネス科・メカニクエンジニアリング科／共学
 生徒数 1学年約300人
 2023年度卒業生進路実績 国公立大は、岩手大、公立はこたて未来大、岩手県立大、東京都立大などに8人が合格。私立大は、専修大、日本大、早稲田大、神奈川大、立命館大などに延べ134人が合格。



今井智大
 キャリアセンター副部長
 いまい・ともひろ
 同校に赴任して9年目。数学科。



野村学
 教務副部長
 のむら・まなぶ
 同校に赴任して21年目。国語科。



吉田俊哉
 キャリアセンター部長
 よしだ・しゅんや
 同校に赴任して8年目。地理歴史・公民科(公民)。



川村俊彦
 副校長
 かむら・しろう
 同校に赴任して3年目。理科(化学)。

図1 これまでの定期考査の課題(「化学基礎」を4学期制で学ぶ場合)

単元1			単元2								
物質の分類と分離	物質の三態	原子の構造	電子配置	イオンの形成	イオン結合	共有結合	配位結合／金属結合	周期的性質	分子間に働く力	元素の	結晶の性質
1学期の学習範囲＝定期考査範囲 40点							2学期の学習範囲＝定期考査範囲 60点				

課題1) 授業における単元間の切れ目で定期考査が行われるとは限らず、単元の途中で定期考査が行われることも多いため、各単元で育成を目指す資質・能力を丁寧に評価することが難しい。

課題2) 1学期の定期考査が40点だったとすると、その定期考査の範囲だった単元の理解度が2学期以降、40点以上になっても、1学期の定期考査の40点は変わらず、それが評定に反映されてしまう。

※学校資料を基に編集部で作成。

図2 再チャレンジが可能な、単元ごとの評価の仕組み

	1学期			2学期		
	単元1	単元2	単元3	単元4	単元5	単元6
知識・技能	10	20	20	10	10	10
思考・判断・表現	10	20	10	10	10	10
主体的に学習に取り組む態度	10	10	10	10	10	10
単元の素点 計	30	50	40	30	30	30
学期の評点	40			30		

再チャレンジ可能な単元テストで評価

	1学期			2学期		
	単元1	単元2	単元3	単元4	単元5	単元6
知識・技能	10 20(再)	20 30(再)	10 20(再)	単元テストの再チャレンジの実施方法や時期は各教科・科目によって異なり、学期を超えて複数回チャレンジできる教科・科目もある。		
思考・判断・表現	10 20(再)	20 40(再)	10 20(再)			
主体的に学習に取り組む態度	10	10	10			
単元の素点 計	30 50	50 80	40 50			
学期の評点	40 60					

※学校資料を基に編集部で作成。

ストの再チャレンジを認めることとした。23年度は2年次の学問探究専攻のみでの導入だったが、24年度からは1・2年次のDLコース全体に拡大した。

1学期の単元テストの成績が2学期以降の再挑戦で更新

評価の考え方は図2の通りだ。従来

は学期ごとに成績をつけて、最後にそれを足して学期数(同校は4学期制)で割り、総合的評価を行ってきた。当然、一度成績がついた学期の評価を変えることはできなかった。一方、新しい評価の考え方では、2学期は1・2学期の成績で、3学期は1〜3学期の成績で評価するというように、常に年度内のすべての単元が評価対象とな

る。そして、単元ごとの評価の材料となる単元テストの成績は、再チャレンジによって更新可能とした。

例えば、1学期に行った単元1の単元テストの結果が100点満点で40点であっても、2学期や3学期に再チャレンジして80点になれば、単元1は80点で評価される。

「私たちが育てたいのは、最初の結

果が40点だったとしても、60点、80点を目指して努力を続けることのできる生徒です。再チャレンジによって弱点を克服することができたのなら、それは真の学力が身についたということでしょうし、1年間で何ができるようになったか、何を身につけたかを正しく見取り、その結果を評定に反映させることが真の評価のあり方だと考えています」(川村副校長)

再チャレンジの方法・時期は教科・科目ごとに決定

単元テストの再チャレンジの実施方法やタイミングは、各教科・科目担当に任されている。川村副校長が担当する化学では、毎週火曜日を再チャレンジの日として、朝の「専北塾」(※2)の時間で単元テストの再チャレンジを行っている(写真)。生徒は、再チャレンジしたい単元を川村副校長に申し出て、川村副校長はその都度、新しいテストを用意して取り組ませている。数学の今井智大先生のクラスは、昼休みや放課後に単元テストの再チャレンジを受け付けている。既に8割近い点数が取れていても、よりよい成績を目指して再チャレンジを希望する生徒もいる。なお、今井先生は、単元テ

ストの得点が3割以下の生徒には、学力保障の観点から、再チャレンジを必須としている。

野村学先生が担当する国語では、単元テストの結果と単元末に課すレポート、そして「R80」(※3)を材料に、単元ごとの評価を行っている。単元テストでは主に知識・技能の観点で、単元末レポートでは主に思考・判断・表現の観点で評価する。単元末レポートのテーマは、単元で取り上げた素材文の内容が、他教科・科目や社会的なトピックなどどうつながっているのかを考えさせるものになっている。

「当初の単元末レポートは、単元で取り上げた素材文の内容を振り返るだけのものでした。ところが何人かの生徒が、学んだ内容だけでなく、ほかの教科・科目の内容との関連まで言及したレポートを書いてきたのです。教師の想定を超えて生徒は学びを広げられるのだと気づき、単元末レポートのテーマを変えることにしました。生徒の可能性を知ったことで、評価のあり方が改善されたのです」

生徒が持つ資質・能力の高さに気づいた野村先生は現在、単元テストで初見の素材文を使用することを検討している。

「汎用的な力を身につけさせるため

には、教科書に載っている素材文とは異なる素材文を使った単元テストを行い、単元の学習目標に到達しているかどうかを見る必要があります。それが実現できれば、大学入試にも対応できる学力を単元テストを通して育むことが可能になると考えています」(野村先生)

評価と学力について議論する中で不安が払拭

定期考査の廃止と単元テストの実施が決まった当初は、「定期考査がないと生徒が集中して勉強しなくなるのではないか」「頻繁に単元テストが実施されるようになると、生徒が単元テストの対策に追われ、疲弊するのではないか」といった不安を口にする教師も少なくなかった。そうした声に対して川村副校長は、定期考査が抱えている問題や、単元テストを軸にした単元ごとの評価の意義を説き、教師間の共通認識を図っていった。そして、単元テストの実施が始まってしばらくすると、生徒が日常的に学習する姿が見られるようになり、教師たちの考えは変わっていった。

キャリアセンター部長の吉田俊哉先生は、学校を変えなければならない



写真 3年生「化学」の単元テストに再チャレンジする生徒たち。

という思いを、教師たちが潜在的に持っていたと指摘する。

「少子化が進む中、学校の魅力を高めていかなければいけないという意識を、私たち教師も少なからず持っていたのだと思います。それが定期考査の廃止と単元テストの実施という変化を受け入れる素地になっていたのかもしれない。定期考査の廃止と単元テストの実施は22年度の生徒募集でもしっかり告知しており、生徒は改革が行われている前提で入学しているので、保護者などから定期考査の廃止に対する問い合わせはありませんでした」

定期考査の廃止や単元テストの実施

* 2 生徒が自分の学びたいこと、深めたいことを大切にして自ら選択し、専門性を高める放課後や長期休業中の学びの場。

* 3 接続詞で結ばれた2文構成かつ80文字以内で活動を振り返る。「R」は、リフレクション(振り返り)とリストラクチャー(再構築)のこと。茨城県立並木中等教育学校の中島博司元校長が考案。

が教師たちに受け入れられたのは、単元ごとに評価することの意義をしつかり伝えたことも大きかったと、川村副校長は振り返る。

「その場しのぎではない真の学力を生徒につけさせたいという思いは、どの教師も同じです。定期考査の廃止や単元テストの実施という手法論から入るのではなく、評価の目的や生徒に身につけさせたい学力を何よりも優先して伝えたいからこそ、教師間の共通認識が図れたのだと思います」

生徒一人ひとりに寄り添う 教科面談を充実させる

一つひとつの単元をどのように教えるのかを、教師がより深く考えるようになったことも成果の1つだ。

「単元ごとの評価を行うようになったことで、その単元を通して生徒にどのような力を身につけさせるのか、そのためにどんな学習に取り组ませ、どのように評価するのか、授業計画をこれまで以上に練り、見直しを持って各単元に入っていくようになりました」
（野村先生）

学期シラバスを基に単元シラバス（図3）を作成する教科・科目も出てきており、授業改善のスピードはさら

に上がっている。

また、単元ごとに丁寧に評価を行うようになったことで、生徒の資質・能力を見取る教師の力が高まっているように感じると、吉田先生は語る。

「単元ごとの評価を実施するようになってから、評価方法の引き出しが自分の中で増えていきます。私が担当する公民科では、単元テストだけでなく、パフォーマンステストを実施する機会を充実させたのですが、『この生徒はこんな深い洞察をするのか』などと驚かされることも増えました。定期考査で出していたような問題では見逃していた生徒の資質・能力を発見することができています」

今後の課題は、単元テストの再チャレンジの時間をいかに確保するかだ。再チャレンジは希望制のため、授業中に行うのは難しく、現状は朝の専北塾の時間や昼休み、放課後に行っている。生徒と教師双方の負荷を軽減するため、CLASS(*4)を活用したCBT(*5)形式での実施もいくつかの教科・科目で始まっている。

単元ごとの評価の実施を契機に、これまで以上に生徒一人ひとりと向き合っていきたいと、川村副校長は語る。

「単元テストを軸にした単元ごとの評価や単元テストの再チャレンジを実

施する目的は、生徒が自分で立てた目標を達成しようとする学びに向かうマインドを育成することにあります。目標と現状にギャップがある生徒を見逃すことなく、教科担当の教師が個別に面談

を行い、学習状況を生徒と一緒に検証して、学習方法の見直しや単元テストの再チャレンジを勧めるなど、生徒の主体的な学びを支えていきたいと考えています」

図3 単元シラバスの例（「化学基礎」）

R6 2年DL (学探・PBL)コース 化学基礎【化学結合】単元シラバス
専修大学北上高等学校 授業担当者 近藤健一

評価方法	評価基準
・演習プリント、小テスト、個別添削プリント、課題実験の取組達成状況	・知識・演習プリント・小テスト(知識分野)の取組状況 ・思考・演習プリント・小テスト(思考分野)の取組状況 ・主体・授業・実験の取組姿勢

時数	履修内容	授業内容
1	①イオン結合 イオンの生成	【講義】イオンの生成について 【演習】問題プリント配布・イオンの小テスト①
2	イオンの表し方 イオンのなりやすさ	【講義】イオン化E・電子親和力について 【演習】問題プリント配布・小テスト取組時間
3	組成式の表し方	【講義】組成式の表し方【演習】組成式の小テスト②
4	【課題実験】イオン・イオン結晶の性質	水溶性・電導性(塩化ナトリウムの融解時の通電)・機械的性質(岩盤の割断)の確認
5	②共有結合 分子の生成	【講義】分子の成り立ち【演習】分子の小テスト③
6	電子式・構造式	【講義】電子式の表し方【演習】問題プリント配布
7	結合の種類・配位結合	【講義】配位結合について【演習】問題プリント配布
8	分子の極性・実験説明	【講義】次回の実験の説明【演習】小テスト取組時間
9	【課題実験】分子の極性	四塩化炭素の性質確認 極性・無極性物質の相違点
10	実験のまとめ	【講義】実験の考察【演習】問題プリント配布
11	分子結晶・高分子化合物	【講義】分子結晶【演習】高吸水性樹脂
12	共有結合の結晶	【講義】性質の説明【演習】問題プリント配布
13	金属結晶	【講義】自由電子と金属結晶【演習】問題プリント配布
14	化学結合のまとめ	【講義】化学結合のまとめ【演習】小テスト④

【授業方針】
・講義時間は20分前後とし、授業の後半は演習時間として確保する。
・様々な生徒の理解度、取組具合に対応する教材を事前に準備する。
・生徒は小テスト、問題プリントを全て正答した状態を課題達成とする。
・小テストは個別で取り組むものとし、問題プリントは協同して取組可とする。
・演習時には、適宜状況監視を行い生徒の進捗状況を確認し、支援が必要な生徒には個別で対応する。
・演習の内容は、授業の内容の確認として問題プリントを取り組ませる。また必要に応じて小テストを実施する。
・問題プリントを終えた生徒には添削用プリントを配布し個別に添削を行う。

【授業内容のポジショニングマップ】

1つの単元をどのように展開・指導し、評価していくか、学びのストーリーを教師が描くために単元シラバスを活用したいと考えている。その際、進度やレベルだけでなく、講義中心か、生徒の活動中心かなど、学びのスタイルも意識する。今後、評価の観点や評価方法も単元シラバスに加え、単元シラバスを練り上げていく考えだ。

※学校資料を基に編集部で作成。

*4 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。
*5 Computer-Based Testing の略。コンピューター上で実施する試験。